
ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

人間花火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜紅蓮の錬金術師〜

【Nコード】

N4373BA

【作者名】

人間花火

【あらすじ】

兵藤一誠の親友、時風篠がゆくファンタジーバトルアクション！！
カッとなってやった、反省はしているが後悔はしていない（キリッ）
あまり叩かれすぎるとホコリどころか涙も出てきてしまいます（泣）

はじめに

わたしは人間花火《にんげんはなび》と申します。

処女作なので。生温かく見守ってやってくださいお願いします。

このページの使い方もよくわかりません（泣）

勢いでやってしまいました（汗）更新亀になるかもしれない。あと誹謗・中傷勘弁してくださいね。

皆さんが描いた小説を見てみるとすごくレベル高いなあと思いました。公開処刑ですね、分かります。

あと原作頑張って読めますがしばらくテレビアニメ沿いになるかもしれない。あ

ではお粗末かと思いますがよろしくお願いします。

主人公設定

名前：時風 篠

武術：主に父親に叩きこまれた軍隊格闘術を使う。

装備：多種多様の錬成の定義がされた布。

錬金術：右手に硫黄の錬成陣、左手に水銀の錬成陣を持つ。更に手首に巻くように錬金術の輪になるものが刻んであり、構築式は指の腹に書き連ねてある。地面・金属系の元素定義が為されている。他にありとあらゆる錬成陣が記してある布を何枚も持っているため必要に応じて適した布を取り出し術を行使する。

性格・容姿：長い黒髪を後ろで一つに束ねたイケメン系目。普段は敬語だが真面目になったり怒ると目が少し開き口調も変わる。現役軍人であるためか非常時にもナチュラルに対応できる。変態紳士。争い事は嫌う。17歳のくせに全てに於いて達観している。

身元：両親ともに軍人。自分が軍人であることを隠して学校生活を送っている。

親友である一誠しかこのことを知らない。

戦闘傾向：基本拳闘で闘い、必要に応じて錬金術（主に兵器、爆弾錬成）を役する。

得意：料理、スポーツ（戦闘）、駆け引き、諜報活動

不得意：勉強、情事（耐性は十分あるが苦手なだけ）

第一話 ～日常～（前書き）

いや〜、始まってしまいましたね。上手く描けるかガクブルですよ私……。でも頑張る！

第一話　～日常～

天気は晴天・・・そこに駒王学園の芝生に仰向けで横たわる男たちがいた。

「あゝ・・・おっぱい揉みてゝ・・・」

頂垂れるように呟くこの青年の名は「兵藤一誠」。顔は良いのにスケベなことしか頭にないたため女子にはモテない俗に言う残念なイケメン・・・

「・・・はあ・・・いきなり何を言い出すのです？一誠？気持ちはわかりますが。」

この物腰の柔らかい敬語口調の青年の名は一誠の唯一無二の親友、「時風篠」。この青年も顔は良いが二次元に片足を突っ込んでいてエ○ゲーマーというこれまた残念なイケメン

「兵藤一誠君に同意！」

丸刈りで若干猿顔の青年は「松田」

「言つな・・・虚しくなるだけだ・・・」

片手で眼鏡をくいつと持ち上げ冷静に話す青年は「元浜」

「篠、松田、元浜・・・どうして俺達はこの学校に入学した？」

一誠が誰に問うでもなく呟くように言う。

「我が私立駒王学園は女子校から共学になって間もない・・・よつて、圧倒的に女子が多く・・・海外からの美人留学生も多数！そのため・・・男子は希少！つまり！黙っていてもモテモテなわけだ！それ即ちハーレム！」

「その通り！おっぱい溢れるリア充ライフ！」

「・・・の筈が彼女一人できないまま二年目の春を迎えちゃった・・・」

「虚しいものですね～。私も入学したての頃は結構行けそうな雰囲気

気だったんですけど・・・あなた方とエ○ゲートークばかりしていたらいつのまにか距離を置かれていましたからねえ・・・おや？」
篠は何かに気づいたように運動部のランニングコースの向こうを見た。

「どうした我が同志時風よ！」

「松田君・・・いえ、ほらあそこ。」

「・・・ん？」

「木場くん、この後どうするの？」

「ねえ、一緒にお茶に行かない？良いでしょ？」

駒王学園の制服を着たモブのくせにやけに可愛い女子生徒三人組が木場と呼ばれる男子生徒に話し掛ける。

「ごめん、これから部活なんだ。」

「えゝ残念。」

「せっかく誘ってくれたのに本当にごめんね！また今度誘ってよ」

「・・・はあゝ／＼／＼／格好良い／＼／＼／」

あんなベターな会話を交わすだけで女子生徒のハートを射ぬいてしまつ。

「2年C組木場祐斗・・・全女子生徒憧れの対象にして・・・」

「我々全男子生徒の敵！」

元浜の言葉に繋がるように松田が言う

「くっそー！ちょっと顔が良くて頭も良くて性格が良いくらいで入れ食いしやがってー！！」

「一誠・・・十分なモテ要素なのは？・・・」

「言つな・・・虚しくなる・・・」

元浜が悲しそうに眼鏡を直す。

「あゝ世の中不公平だよな」
「誠が頂垂れていると

「お！そろそろ時間」

松田が何か荷物を持って芝生を出ようとする。

「どこにいくのですか？松田君？」

篠が問いを掛ける。

「……………むふう」

松田がまるでこの世のものでないかのようないやらしい笑みを浮かべる

「「「？」「」」

場所は変わって体育館裏？

「村山の胸ちょーでええ」

松田が興奮しながら言う

「80 70 81」

元浜が眼鏡で分析？する。

「片瀬！良い脚してんな」

「78 65 79」

「体育の時間、偶然見つけちゃってさ」

そう……この男は体育館に通じる女子更衣室に穴が空いていたのを見つけ時間を見計らって覗きをしていたのだった。

「コラ！俺達にも見せる！」

松田のみつともなく出た尻を掴み引き出そうと試みる一誠。

「いや！私は別に見なくていいです。フラグが立ってるんで。」

軍人としての危険察知能力だろうが篠は断りを入れる。

「一人占めすんなっての！おい！！！」

「おい！！！！」

「えっ？」

「何今の声！？誰かいる？」

「「やべっ」「

「のわあ！？」

ドサツ

覗いていた松田と元浜はいきなり突っ込んでいた体を抜き逃走を図る。

中の様子が分からなかった一誠は二人を穴から引きはがすのに夢中だったので突然二人がどいて、勢い余って倒れてしまった。

「いつてて・・・ったくなんだよ松田あ！元浜あ！篠あ！」

「・・・またあんたらかあ！」

怒気を含んだ声を出す女子剣道部員

「このお・・・」

「エ口猿！！！」

竹刀を一誠に向けて構える女子剣道部員達

「「ら」つて・・・え？まじで？ちょ・・・待つてぎゃあああああ

あああああ！！！」

「いつてて・・・竹刀で殴るかふっ・・・」

「災難だったな一誠」

「置き去りにしやがって！これでおっぱいの一つも見れたなら納得
もしようが見てもいねえのにこの理不尽・・・」

「どうしたんですか？一誠上なんか見て・・・！？」

「あ・・・」

窓の中から自分を見るのは紅髪の美女だった。

「・・・」

窓から青年たち・・・いや、一誠を見つめる紅髪の美女。

「旧校舎に人がいたんだなあ・・・」

「いいなあ・・・あの真つ赤な髪・・・」

ニヤける一誠

「リアス・グレモリー。99 58 90。3年才カルト研究部部长。出身は北欧という噂だ。」

元浜が解説する。

「グレムリン？何ですかそれは怪物ですか？」

「グレモリーだ！時風！」

「ああ、すみません」

（・・・リアス・グレモリー・・・今私を感じたものは一体・・・

）
はしゃぐ三人を余所に一人だけその紅髪の美女がいた窓を訝しげに見つめる篠・・・

「気のせいですよね・・・まさか・・・人の気配がしなかったなんて・・・」

「今の子・・・」

紅髪の美女がチェスの駒を手に持ちながら口を開く

「はい？・・・」

「左から2番目にいた子よ・・・それと・・・」

（人間の男はみんな私に同じような視線しか向けないけれど・・・あの糸目の子は何か違ったわね、何て言うのかしら、私を調べるように見ていた・・・眼で見るだけで全てが分かるはずなのに・・・

）
「2年B組の・・・確か兵藤とかいう・・・あの男の子が何か？」

「・・・いえ、勘違いだと思うけど・・・ね・・・チェックメイ
トー」

この時、一誠と篠、どっちに向けて言い放ったのかは分からない。

第一話　く日常く（後書き）

ふむ・・・まあこんなもんですか・・・どうでしたかねえ。
オリ主もうちよつとセリフ入れたほういいすかね？

やっぱ二次小説難しいな
ではまたノシ

第二話〜日常の崩壊〜（前書き）

小説買いました。まず一巻だけ。

気づいたんですが・・・アニメ規制しろよ（笑）

何ですかあれは、もう色々突っ込みたいですよ全く・・・

第二話〜日常の崩壊〜

「はあ〜、暗い青春だ・・・このまま俺の学園生活は花もなく、おっぱいに触れることなく終わるのか〜。」

夕日が綺麗などある歩道橋で手すりに頬杖を突きながら佇む一誠。

「仕方ないですよ一誠。私達はモテる努力を怠っていたんですから・

・・・」

「モテる努力つて何だ、篠？」

「・・・私にも分かりませんよ。」

「はあ〜」

「まあ、きつといつか良いことがありますって!」

「その言葉・・・何回聞いたり言っただことか・・・」

(こんなに落ち込んでいる一誠なんて、らしくもありませんね〜何か元気付けれないでしょうか・・・)

篠が思案していると・・・

「あ、あの!」

「んあ？」

「はい？」

「駒王学園の兵藤一誠君・・・ですよね・・・？少しお話したいことがあるので・・・」

「ん〜・・・はい？何か用ですか？」

(見慣れない制服だな・・・どこの学校だ・・・？って可愛い〜)

(え〜と・・・用があるのは一誠の方のようですね・・・有り得ないとは思いますが、念の為外しておきますか・・・)

「一誠、私用事を思い出したので行きますね？」

篠が気を遣いその場を退く。

「お・・・おう!じゃあな、また明日学校でな!」

「はい、さようなら一誠。それとその君も」

篠が付け足すように女の子にも別れを告げる。

「な！なにいい！！！！？？？？」

「何故・・・！？？」

「おやおや〜」

驚きを隠せない一誠以外の三人組。それはそうだろう何せあの一誠が女の子と並んで登校してきたからだ

「あ、この子、天野夕麻ちゃん」

何やら得意気に話す一誠

そして夕麻に三人を紹介する

「こいつら、俺のダチの時風と松田と元浜」

「よろしくね？」

天使のような満面の笑みを浮かべる天野夕麻と呼ばれる美少女固まる松田と元浜、それに追い討ちをかけるように続ける一誠

「一応・・・俺のか・の・じよ。」

「彼女」を強調しながら言う一誠

「じゃ、行こう？夕麻ちゃん？」

「はい！」

三人に会釈して自分の彼氏・・・一誠の後を付いていく

「裏切り者めえ〜！」

「ぐわはあ！」

血？の涙を流す松田と元浜

（何なのですか・・・あれは・・・あれは有り得ない！天野夕麻・・・一体何者ですか・・・分かりません・・・）

先日のリアス・グレモリーと同様のものを感じ一人問答をする篠

（何事もなければ良いのですが・・・しばらく・・・様子を近くで見えますか）

・・・放課後

とある夕暮れの歩道橋・・・

「デート！？？」

「うん・・・駄目・・・かな？今度の日曜日。」

「いやいや全然良いよ！」

「良かった〜」

「じゃあまた・・・！」

嬉しそうに掛けていく彼女の背中を見つめる一誠

「デート！楽しみにしてるね！」

立ち止まり、そう言う彼女・・・

「うん・・・おれも・・・」

「ん〜！！やったあデートデート！何ていい響きなんだ！」

歩道橋を下りていく一誠。

「ペろ・・・」

その姿を棒アイスを舐めながら眺める小柄の少女がいた・・・

「そう・・・」

「やっぱり部長の勘は・・・？」

先程の少女が言う

「正鵠を射ていたと・・・？」

黒髪のポニーテールの美女が続ける

「あなたに見張らせていたのは正解だったようね・・・」

部長と呼ばれるその人リアス・グレモリーは言った

「部長どういたします？」

「下ごしらえだけはしておくわ・・・けど・・・あとは彼次第ね・・・

「・・・」

「そろそろ時間なんだけど・・・」

私服で外を出歩くのはおそらく久しぶりであろう一誠はそわそわしていた

「お願いしま〜す」

街中で何か紙を配るバイトらしき女性。それを受け取る一誠

「あ〜つい取っちゃった・・・ん・・・？なにになに・・・？あなた

の願い叶えます？うえっ！怪しさバリバリ・・・」

「一誠君・・・！」

「あ！おはよう夕麻ちゃん！」

紙をポケットに入れる

「ごめんね？待った？」

息を切らしながら尋ねてくる夕麻

「全然！待ってないよ！今来たところだから」

「良かった」

（くう〜一度言ってみたかったんだよなこのセリフ！）

「じゃあいこうか？」

「うん！」

夕麻の手を引く一誠

夢にまで見たデートが始まる。

商店街に行き洋服を買ったりパフェを一緒に食べたり、それはもう楽しそうだった。

そして日も落ち辺りも暗くなったところ・・・

「今日は楽しかったね！」

「ああ！最高の一日だったよ！」

二人で歩きながら話す。手が触れるか触れないかの距離・・・

「ここが漢の見せ処！」

一誠は意を決し彼女と手を繋ごうと試みる。

ギユツ・・・

「あ・・・」

「やったあああ！握ったぞ！手え握ったぞ！」

手を繋ぎながら歩く一組のカップル

すると噴水があるところに来た、彼女は一誠が握っていた手をいったん離し噴水の元へ駆ける

「ねえ一誠君・・・私達の初デートの記念に一つだけ私のお願い聞いてくれる？」

「!？」

(これっでもしかして・・・キ・・・キ・・・！)

「な・・・何かな？お願いって？」

期待に胸を膨らませながら彼女の言葉を待つ

「ふふ・・・」

「・・・死んでくれないかな？」

第二話〜日常の崩壊〜（後書き）

疲れますね中々・・・

だげど負けません！そして次回ついに主人公が戦闘を！

戦闘描写難しそうなんで不安っす・・・まじで・・・

第三話 日常の崩壊と死刑宣告（前書き）

ではよろしくお願いします。

第三話 日常の崩壊と死刑宣告

「死んでくれないかな．．．？」

「え．．．？」

一誠は戸惑いながら

「ごめん夕麻ちゃん．．．もう一回言ってくれないかな？俺の耳変
だわ」

聞きなおす一誠

「死んでくれないかな．．．？」

（間違いない．．．俺の耳は変じゃなかった！いやでもちよつと待
つて．．．ええ！？死んでつて．．．）

その瞬間夕麻は何か黒いものに包まれ、あっという間に布の少ない
服装になってしまった

そして黒い翼を背中に生やし少し離れたところにゆっくりと着地す
る．．．

（は．．．ね．．．？）

（まずいことになりましたねえ．．．まさか突然死刑宣告とは．．．
一誠には悪かったですが尾行しておいて正解でした．．．）

近くの茂みに隠れているのは一誠の親友．．．篠

デートの最中ずっと気配を消し二人の尾行をしていた

（何事もなければ良かったなどと．．．自分に腹が立ちます！分か
っていたはずです！彼女が人でないなにかなど！分かっていたの
にこの体たらく．．．ぬるま湯につかりすぎていましたかね．．．）
静かに自分で自分を叱咤する篠

「しかし！猶予はありません！あの女が何かをしてくる前に．．．
出る！」

「楽しかったわ．．．あなたと過ごした初々しい子どもそのままことに

付き合えて」

妖艶に一誠を見下す天野夕麻

「あなたが買ってくれたこれ・・・大事にするわね・・・」

「ゆ・・・夕麻ちゃん・・・」

夕麻の手には光が集束し一本の槍になる

「—————待つて頂きたいですね!」

「!?!」

ガシャァン!!

どこからか鎖が伸びてきた・・・夕麻はこれを難無く後ろに跳躍し避ける

バチバチ!

錬金術による錬成反応音が鳴る・・・

「し・・・の・・・?」

一誠と夕麻の間に歩き立つのは親友の篠。一誠はまた訳が分からなくなつた

「なんで篠がここに!?!」

「すみません一誠。不躰かと思いましたが尾行させてもらいました・・・」

夕麻を睨む篠

それを余所に

「尾行・・・?なら私が気付くはず・・・この子一体・・・」

「あなたは一体何者ですか・・・?天野夕麻・・・」

「私?それをあなたに答える筋合いがあるの・・・?人間!」

光の槍を投擲してくる夕麻

ビュン!

「くっ!」

篠は片手を地面に置く

バシィ!

自分と一誠を守るようにして錬金術により鉄の壁を作りだす・・・だが・・・

バガン！ガラガラ……

光の槍の投擲を防ぎ切れず鉄の壁を粉碎する。

「ぐああ！」

後ろに吹き飛ばされる篠

「あなた……面白いことをしているわね……糸目君？」

光の槍を再び集束させ構える夕麻

（鉄をも砕く槍ですか……。しかしあんな槍見たこともありませんね……。光ってますよ……。正攻法では一誠に被害が及ぶ……。！小細工をしましょうか……。）

ヒュッ！

「！？」

身構える夕麻を余所に、先程あつた噴水の傍に高速で移動する、篠は胸ポケットから布を取り出し、噴水の水に浸ける。

「何を？」

不思議そうに見る夕麻

バシィ！

ポオン！！

「何！？水煙？とんだ小細工ね！目暗ましのつもり！？」

ビュンッ！

「な！？いつの間に……！？」

篠は夜目が利くので水煙の中確実に夕麻の懐に接近していた

「はあっ！！」

掌底を夕麻の腹に打ち込む！

「ぐ……。ああ……」

ドゴオン……！！

掌底を食らい吹き飛び、噴水にぶち当たる夕麻

「はあはあ……。く……。手応えが少ししかありません……」

苦い顔をしながら言う

「本当にやるわねえぼつや……。？面白いわ……。けど……」
水に濡れた体をお構いなしに立ちあがってくる夕麻

「・・・けど？・・・はあ・・・んく・・・」
「本気を出してないみたい・・・」
「何・・・？」

「それは一体どういう意味でしょうかねえ・・・！」
怒気を含めながら言い放つ篠

「そのままの意味よ・・・あなた・・・私を殺す気・・・ある？」
「!？」

「ないでしょうねえ」

「だったら何だと言っんですか!？」

「本気にさせるには・・・これしかないわよね・・・？」
ヒュン!

槍を一誠に向けて投げる!

「まずい!一誠!！」

(動きすぎました!あんな女から一誠を背に、守るよじりして闘っていたのに・・・!!くう!)

ドブシュッ!!

「ぐ・・・あ・・・あ・・・ぐふ!!」

ドサツ!

(一誠が・・・刺された・・・くそ・・・!!)

「一誠!！」

光の槍に刺された一誠に駆け寄る・・・

「一誠!一誠!」

「あ・・・ぐ・・・篠・・・」

「俺・・・死ぬのか？」

(この傷口は・・・くそ!何か・・・!何か手立ては・・・考える・・・考える・・・思考を止めるな!!)

「楽しかったわ・・・素敵な思い出ありがとう・・・ふふ・・・
あなたもね・・・糸目君？」

夕麻は微笑みながら言い、その場から消える

「人間には教えられないわ・・・」

「では一つよろしいでしょうか？」

「何かしら」

「あなたは先刻のあれと同類ですか？」

ピシッ！

空間が砕けたと錯覚するほど周囲の空気が変わった

「あれと同じにされるのは心外だわ・・・」

静かだが怒っている

「む・・・気に障ったのなら謝ります。なに分あなた方のような人外と対面するのは初めてでして・・・初回は許していただけませんか？」

「・・・分かったわ・・・そちらの言い分も最もだし許すわ・・・でも二度目はないわよ？」

「はい。」

「それにしてもあなた物怖じしないのね・・・」
パアアアア

リアス・グレモリーの辺りが光り始める。戻るのだろう

「・・・何も聞かないのね？その子をどうしたの」とか

「人間には教えられないとおっしゃったのは他でもないあなたじゃありませんか・・・」

「ふふ・・・それもそうね」

リアス・グレモリーは消え、その場は二人になる

「一誠を運ぶとしますか・・・」

第三話 日常の崩壊と死刑宣告了（後書き）

う……………うう……………（泣）

全然上手く描けません……………

戦闘描写難しい……………

第四話〜異変〜（前書き）

さて始まりました。

PV数が非常にうれしいことになってますね。（自分としては）
読んでくれた方々そして訪れてくれた方々もありがとうございます！

これからもがんばります。

第四話〜異変〜

「ああ・・・ねみい・・・こいつの所為で変な夢見ちまった・・・」
目覚まし時計を止める一誠

「・・・夢？」

校舎内・・・階段にて・・・

「お前らマジで夕麻ちゃんのこと覚えてないのか？」

「だから何度も言ってるんだろ？そんな子知らねえって・・・」

松田が両手を頭の後ろにやりながら言う

「第一一誠に彼女とか有り得ない・・・」

元浜がしゃがみながら言う

「・・・」

篠は無反応だ

「んんは？あるか！ちゃんとメアドだつて・・・」

携帯を弄りながら確認するが

「ない・・・？夕麻ちゃんの電話番号も・・・アドレスも・・・消えてる」

「・・・！？」

三人が駄弁ついているところに階段の上から見慣れた美女が紅髪をなびかせながら降りてくる

「あ・・・」

「おっリアス先輩！」

「え？マジ！？」

「リアス先輩よ」

「いつ見ても素敵ね」

三人と同時に周囲に居た女子生徒達もざわめく

一誠の横を通る・・・

「・・・ふふ・・・」

流し眼で一誠を見ながら通り過ぎていく・・・

「・・・・・・・・・・？」

次に一瞬だが篠の方にも向けた

「やっぱ美人だよなあ、リアス先輩」

「うむ！あの近寄りがたい気品が如何とも何とも・・・」

松田と元浜が口を開く

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・お前AV妄想ばっかしておかしくなったんじゃね？」

「そ・・・そんなわけあるか！お前と一緒にするな！俺は確かに・・・」

「

「いゝから！そんなことより、今日は俺ん家に寄ってけ！秘蔵のコレクションをみんなで視ようじゃまいか！エロDVD」

「やくねあいつらいつつも」

「いやらしいことしか頭にないのよ、サイテー」

通り過ぎる女子生徒が聞こえよがしに話す

「うおっほん！」

（うおっほん！じゃありませんよ全く・・・）

場所は変わって松田の家

「変身！うぶん」

「うおー！これは桃ちゃんの新作！カフェンライダーピンクー！！」

「ふふふ！入手にはちと苦労したがな」

「雰囲気盛り上げるためにも！部屋の明かりを消そう！」

パチ

部屋の明かりが消え真っ暗になる。点いているのはテレビ画面の電気だけだ・・・

「！？」

ここで一誠は自分の異変に気づいた

(視えている、光はないのに視えている・・・！)

「一誠・・・今日は帰りましょうか？体調も優れないようですし・・・」

「篠・・・？・・・ああ・・・そうだな篠の言つとおりだ・・・」

「私も帰るつもりでしたからね。」

「？、そうなのか？」

「はい、聞きたいこともありますし・・・ね」

松田と元浜に途中で帰ると告げ松田の家を出た一誠と篠・・・

始めに篠が切り出す

「一誠・・・実は私も一誠と同じ夢を見ました・・・否、ここまでくると夢ではないかもしれませんが」

「どんな夢だった？」

「私が・・・一誠と天野夕麻のデートを尾行していて、天野夕麻があなたを殺そうと光る槍を手に持ったところで私が出てきました」

「それで・・・？」

「私は闘いました」

「錬金術も使ったのか？」

「ええ・・・使いましたが・・・」

「私の所為で・・・一誠が・・・」
悔しそうに下唇を噛む篠

「そうか・・・俺・・・死んでたか・・・」

「ですが・・・不可思議。何故あなたが生きているのか、ここで立つて話しているのか」

「そうなんだよな」

一誠が困ったように頭を掻く

話しながら歩いているといつの間にか気のないところに出た・・・

(ここは・・・覚えていて・・・ここは覚えている！)

(ここは・・・噴水・・・同じですね・・・)

「くそ！何だつてんだよ！」

一誠がいきり立つ

「ここ・・・覚えがありますよね？一誠・・・」

「ああ・・・覚えてる・・・夕麻ちゃんとの最期のデート場所・・・
そして・・・」

『「俺」「あなた」が死んだ場所・・・』

ゴオオオオオオ！

「！！？」

二人が突風を感じる

「これは数奇なものだ・・・こんな都市部でもない地方の市街で貴様のような存在に会うのだからなあ」

（何言つてんだこいつ頭イっちゃってんのかおい！？でもなんか震えが止まらねえなんだあれ！）

（この気配・・・やはり同じですね・・・！）

「ふふ・・・！」

「！！？」

ビュウウウウ！

「なんだこれ！？ちよつと退がっただけなのに！」

一誠は数十メートル先に居る変なおっさんに恐怖を感じ後ずさつたが、予想外にも跳躍し空を飛んだかのように後ろに退がり着地した

「一誠・・・やはりもう・・・人ではないようで・・・しかし！私の親友というのは変わりありません！親友に人間も化け物もかんけいありません！」

「う・・・く・・・」

一誠は恐怖で動けない

「逃げ腰か・・・」

おっさんがつまらなそうに言う

「訳わかんねえよ！」

「一誠、あなたは先に・・・でもう行ってる！？」
もうすでに親友は逃げていた・・・

「やれやれ……こういうときは流石といったところでしょうか・
・なら……!……!……!」
居ない……

自分の目の前に居たはずのおっさんが……
「まさか!」

「はあはあ……く……はあはあ……」
全速力で走る一誠
パサ……

「羽……?夕麻ちゃん!?うわあ……ぐ!」

おっさんが飛んできて一誠の目の前で着地する

(追いつかれた……?)

「下級な存在はこれだから困る……」

「また夢かよ……!」

「夢……?ふっ、主の気配も仲間の気配もない、消える素振りす
ら見せず魔方阵すら展開しない……貴様……はぐれか?」

手に見覚えのある光る槍を集束させる……

「ならば殺しても問題あるまい。」

「うわあ!」

「ぬ!」

ドツカアアアアン!!

おっさんの足元が爆発した

「これは……?何だ?魔法でも神器セイクリッド・ギアの力ではないな……!」
爆発させた主が姿を現す……

「親友を二度も殺される訳にはいかねえよおっさん!!」

糸目だった眼を半開きにしておっさんを睨みつけるのは篠だった

(殺られるわけには……殺られるわけにはいかねんだよ!……
・俺はあの時学んだ!あの女と同様!殺す気で殺らなければならな
い!)

「ほお……これはまた……人間が悪魔の味方をするか……」

「ぐうううあー!!」

砲撃がおっさんに直撃した。

「お．．．おのれ．．．人間風情．．．が調子に乗りおって．．．
地面に手を付き、篠を睨めつけるおっさん

「貴様．．．一体何者だ．．．!!何だあの不可解な術は．．．
魔界にもあんなものはない!」

「俺としてはあんたらの方が不可解だよ．．．何ださっきの光る槍．
．．フアンタジーもいい加減にしろってんだよ」

無言で睨みあう両者．．．そこに

「その子に触れないで頂戴」

背後に突然現れそう言いながら篠の横を通り過ぎていくのは紅髪の
美女．．

一誠も気づいた

「．．．．．紅い髪．．．グレモリー家の者か．．．!」

おっさんが憎々しげに紅い髪の女性を睨みつける

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子
のちよっかい出すなら容赦はしないわ．．．」

リアス・グレモリー。

そう．．．彼女は自分達の学校の先輩。あの紅い髪の美人だ．．．
そこで一誠の意識は途切れてしまった

それに続くように黒髪ポニーの美女と小柄の少女も歩いてくる

「．．．ふふっ。これはこれは。その者はそちらの眷属か．．．こ
の町もそちらの縄張りだったということか．．．まあいい．．．。

今日のごとは詫びよう．．．だが、下僕は放し飼いにしないことだ。
私のようなものが散歩がてら狩ってしまうこともあるやもしれんぞ．

．．．?

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの．．．私の邪魔をした
らその時は容赦なくやらせてもらうわ」

「その台詞．．．そっくりそのまま返そう．．．それと．．．」
おっさんが篠の方を向く．．．

「そちらの倒れている小僧よりその人間の小僧の方が良い下僕になるかもしれないぞ?」

「それもそうだけれどこの子には特別な力があるのよ・・・」

「ほう・・・?それは?」

「あなたに教える義理があつて?」

「ふむ・・・まあ良い・・・人間の小僧、勝負はまた今度だ・・・」

「え・・・嫌だよ・・・今回はこつちの手札は伏せてあつたから良かったもの・・・次会つたら対策練られちまうよ・・・」

「それを言つたらこちらもそうだが?」

「・・・」

「だんまりか・・・まあ良い・・・グレモリー家の次期当主よ。我が名はドーナシーク再び見えないことを願う・・・」
黒い光を灯しおっさんは消えていく・・・

「また会つたわね・・・糸目のぼうや・・・」

「・・・」

聞こえない振りをして現実逃避する篠

「全く・・・じゃあ全部教えてあげるわよ?私達のことも・・・」

「!?!?」

篠が三人に振り返る

「この子も何とかしてあげなくちゃいけないし・・・」
気絶している一誠を指差して言う

「は・・・分かりました・・・従いましょう、どうぞその馬鹿を連れて行ってください」

諦めたように言い放つ

「じゃあ連れていくわね?明日学校で使いの者をよこすから・・・」
「はいはい」

(彼女ならば平気でしょう・・・一誠を殺すならあの時点で手を下していたはずですからね・・・)

そう思いながら三人の女性に背を向け手を振る篠

「部長……？あの糸目の子、行かせて良かったんですの？」

黒髪ポニーが尋ねる

「大丈夫よ……彼はこの子と親友らしいし……放っとくような真似はしないでしょ？」

「それじゃあ私はこの子とやらなきやいけないことがあるから、あなた達は先に帰っていて？」

「分かりましたわ」

「……」

リアスの言葉に頷く黒髪ポニーと小柄な少女

時風篠と兵藤一誠……この二人の日常は完全に崩壊した……

第四話 異変 (後書き)

オワタ!

主人公に神器を与えようか迷っています・・・

第五話 〽新しい性活!??〽 (前書き)

また性懲りもなく始めました

第五話〜新しい性活!〜

『オキナイトコロシマス、オキナイトバラバラ……』
「ん……」

(目を覚ましてみればいつもの朝だ……
どういうこと!?)

……また嫌な夢を見たってことか?
だが……リアルすぎる。

ヤンデレボイスの目覚まし時計に起こされた俺だがどうやらまた夢
を見ていたようだ。

今度は夕麻ちゃんじゃなくて変質者のおっさんに追いかけられる夢、
黒い翼は同じなんだけどな……)

振り払うように頭を振る

(しっかりしろ!俺。なんでこう毎朝変な夢を見る?確か昨日は普
段通り過ごして放課後松田の家に行って俺と篠と松田と元浜の四人
でエロDVD鑑賞会をしたんだ。で、家に帰ってきた、帰る途中で
翼生やしたおっさんに襲われたなんてことは……)

ふと鏡を見る……

(裸……裸あ!?)

一切の衣類を身につけていない

(パンツすら穿いてない!?どうなってんだこれ!?)

「……ううん」

(っ!)

何やら艶っぽい声が聞こえたぞ……?

恐る恐る視線を隣に移す。

「すーすー……」

寢息の主は紅髪の女性……我が校のアイドル、リアス・グレモリ
ー先輩だった

(ん?んん!?)

(な・・・なんでリアス先輩と俺がベッドインしちゃってんの!?)
超焦る一誠

「一誠!起きてきなさい!もう学校でしょ!」
「母さん、一誠は部屋にいるのか?」

「お父さん、玄関に靴があるんだから帰ってきてるのよ!もう!夜遅くまで友達の家にいるなんて!その上遅刻だなんてゆるさないわよ!」

怒りながら上にながってくる母さん

(ちよい待ち!ちよい待ち、ちよい待ち!!)

(この状況は非常にまずい!)

「うん・・・朝?」

(起きた?目擦ってるし、っーか可愛い・・・じゃねえよどうしよこれ!どうすんのよ!!)

ガチャ

「あ」

勢い良く開かれるドア俺と母親の視線が合うご立腹だ

「おはようございます」

ニッコリ顔の先輩が母さんにあいさつをした。

母さんの表情が一瞬にして凍った。

「・・・ハヤク、シタク、シナサイネ」

機械的な声を出し母さんは静かに扉を閉めた

一拍入れてドタドタと一階に下りる足音

「お、お、お、おおおおおおお!お父さん!!!」

「どうした母さん血相変えて?」

「国際的いいいい!!」

「母さん!?!どうしたの!?!落ち着いて!?!母さん!?!」

俺は顔を両手で覆うしかできなかった

「随分と朝から元気なお家ねえ」

先輩がスリとベッドから出る

(やべえってこれ丸見えじゃん!おい!)

俺が悶えていると

「大丈夫みたいね・・・？」

(へ?)

「昨日・・・気絶しちゃってたみたいだから、意識が戻るまで裸で抱き合っただのよ」

(裸で抱き合っただ!?なんだよおいそれ!?)

「ていうか気絶?俺気絶してたのか・・・？」

(待った!裸で抱き合っただってことは・・・?)

「大丈夫よ、私はまだ処女だから」

見透かしたような一言

「そんな不思議そうな顔しないの。あなたが思っているよりもこの世界は不思議は多いのよ?」

下着姿の先輩が俺に急接近し細い指先で俺の顎をなでた。

「私はリアス・グレモリー。悪魔よ」

「・・・悪魔?何だそれ・・・」

「そして、あなたのご主人さま。よろしくね?兵藤一誠君。一誠って呼んでもいいかしら?」

魔性の微笑みだった

同時刻

「さて、行きますか・・・」

(確か今日はリアス・グレム・・・んん!グレモリー先輩が使いの者をよこすとか言っていましたたっけねえ、日常は崩壊したと思った方がいいでしょうね)

篠は家を出る

因みに篠の両親は軍人の仕事として海外を飛び回っているので必然的に一人暮らしだ

「おはようございますわ、時風君?ご機嫌いかが?」

「おはよう・・・」

(・・・ええ!?)

どういう状況ですかこれは?

昨夜突然現れたリアス・グレモリー先輩と共にいた黒髪ポニーと小柄な少女が玄関先に立っていた

「あの」

戸惑いながらも尋ねる

「何ですか?」

「何故私の家が見つかったのですか?」

「調べました」

真顔で言う黒髪ポニー

(だからどうやって!?)

ここで篠は考えるのをやめた

何故やめたかですか?この人達には常識は通用しないのだと確信したのです!

「まあ良いです・・・改めて・・・私の名前は時風篠です・・・どう呼んでもらってもかまいません」

投げ槍風に言う篠

「あらあらご丁寧に)。私は姫島朱乃です、よろしくお願いします篠君。因みに悪魔です」

(いきなり名指しですか・・・ていうか女性に名指しで呼ばれたの久々ですね)。新鮮です・・・悪魔あ!?!?なんですかそれ!?!?新手的ネタですか!?!?)

「塔城子猫・・・悪魔」

(この子もですかあ!?)

小柄な少女が静かに名乗る

三人は並んで歩きだす

「それで・・・?」

篠が口を開く

「それで・・・その悪魔が何故私を迎えに?学校でという話ではなかったのですか?」

「これは私の個人的な興味ですわ」

「興味……ですか……益々解せません。私はただの人間ですよ？」

「人間だからですよ。それに……妙に達観してませんか？ 篠さんは。」

「……」

姫島先輩の言葉に頭を少し縦に振る塔城さん

「人間で……私達の存在をついこの前まで知らなかったのに、私達の正体を知ってもその態度……少し傷付きますわ……」

「いや十分驚いていますよ！？ 私！」

「そうですか？ そうは見えないんですけど。」

ジト目で見てくる姫島先輩。くっ可愛い！何ですかこの破壊力は！
今まで感じたことのない何かが！

そんなこんなで着きました学校。なんだかいつもより通学時間が長く感じました何故でしょう？

・
・
校舎に入ろうとするとあらゆる視線……痛いですジワジワきます。

まあ、二大お姉さまの一角、姫島朱乃先輩と、密かに人気のマスコットキャラ、塔城子猫さんと並んで登校してきたんですから当然ですか

む？何やら校舎に入ってみると言い合っていますね誰でしょうか
こんな真ん中で……っていつもの三人！？

「お前は我々と同じモテない同盟の同志だったはずだ！」

「一誠、とりあえず理由を聞こうか。俺と別れてから何があった！」

血の涙を流す松田と元浜

その言葉に一誠は笑って言った

「おまえら……生乳を見たことあるか？」

悪友二人はその一言で戦慄していた

第五話く新しい性活！?? (後書き)

ここまで読んでくれた方々ありがとうございました
まだまだ続くので！

第六話 訪問 (前書き)

始まります

第六話　訪問

放課後。

「やあ。どうも」

一誠は半眼で訪ねてきた男子を見ていた。

一誠の前にいるのはこの学校一のイケメン王子、木場祐斗だ。

廊下、各所から黄色い歓声が沸いている。うぜえチヨーうぜえ！

「で、何の用ですかね」

面白くなさそうに返すが横から篠が小声で

「グレモリー先輩からの使いとかなんとか、この人のことだったんじゃないですか？」

「ああ、そうか、ってなんでお前がそれを！？」

「まあまあ」

驚く一誠を宥める篠

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ」

「！」

「でしょう？」

「・・・おkおk、で、俺はどうしたら良い？」

「僕についてきてほしい・・・二人共・・・」

(篠も!?)

「分かりました」

了承し立ち上がる篠

「え！？この状況分かんないの俺だけ!？」

「行きましよう一誠」

「あ・・・ああ・・・」

一誠も立ち上がる

キヤー!!!

「そんな、木場君と兵藤と時風と一緒に歩くなんて！」

「汚れてしまいわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカップリング許せない！」

「もしかして木場君×時風？・・・それはそれでありかも・・・！」

（うぜえ。まじうぜえ・・・）

（女性はどうして美少年が絡むところなんですかねえ・・・理解し
かねますよ全く・・・）

前を歩く憎つくきイケメンに付いていく二人

木場の後に続きながら向かった先は校舎の裏手

旧校舎と呼ばれる、現在使用されていない建物があった。

（・・・随分とまた古そうな建物ですね。木造建築とは・・・しか
し・・・）

篠は歩きながら見回す。

（ガラス窓も割れていない壊れた部分も目立ちません・・・綺麗に
してありますが・・・この辺は何やら空気が淀んでいますね。物理
的なものではありません・・・雰囲気は淀んでいるのでしょうか・・・
）

考えていると

「ここに部長がいるんだよ」

そう告げる木場さん

部長？グレモリー先輩のことですかね？部活に所属していたのでし
ょうか？

謎は深まるばかりだ

歩いていると木場さんがとある教室の前で止まる

篠の後ろについていく俺。立ち止まった篠に気付き俺も足を止め、と
ある教室の戸にかけられたプレートを見て驚いた

『オカルト研究部』

「オカルト研究部！？」

首を傾げる

隣にいる篠でさえも表情が少し困っている顔だ

悩んでいる俺達にお構いなく木場はドアノブに手を掛け開く

「部長、連れてきました」

木場が確認を取ると、

「ええ、入って頂戴」

先輩の声が聞こえてくる

木場と篠二人に続いて室内に入ると中の様子に驚いた

これは・・・驚きました・・・何ですかこの教室は・・・

室内、至る所に謎の文字が書き込まれていた。

篠は瞬時に、書いてあることを理解しようとした。錬金術師は常に考える生き物。考えることをやめたならそれは錬金術師としての死だ。だがいくら視て考えて答えを導き出そうにも全く理解不能だった

一番特徴的なのは中央の円陣。教室の大半を占める巨大な魔方陣らしきもの、決して錬成陣ではなかった

不気味・・・ですね・・・

いわれもない恐怖に駆られる篠。それは横にいる一誠も同様だった
思いながら見渡すとソファアがいくつか。デスクも何台が存在する
ん？ソファアに誰か・・・小柄な少女・・・ああ！朝一緒に登校した
塔城さん！私に気づいているようですが無表情ですね。羊羹食べ
てますよ・・・

「こちら兵藤一誠君に時風君・・・は知ってるよね？」

木場さんが紹介してくれます。ええ存じ上げていますとも

「どうも・・・」

一誠が頭を下げた。それを確認すると羊羹を食べるのを再開する
シャー

部屋の奥から水が流れる音。シャワー？

見ればカーテンに陰影が映っている。女性の肢体ですねこれは

何故シャワー？設備整いすぎてません！？ソファアといいデスクと
いい

キユツ

水を止める音

「部長、これを」

カーテンにもう一人いますね。この声は姫島先輩でしょうか

「ありがとう、朱乃」

カーテンの奥で着替えているようだ

俺は朝のアレを思い出し気恥ずかしくなる。先輩、素晴らしいお体でしたありがとうございます！

「……いやらしい顔」

ボソリと呟く声塔城子猫ちゃんだ

……そうか、いやらしい顔をしてましたか。それはごめんよ

カーテンが開く。そこにいたのは制服を着込んだ先輩の姿。濡れているままの髪がなんとも艶っぽい

「ごめんなさい。昨夜一誠の家にお泊まりして、シャワーを浴びてなかったから、今汗を流していたの」

あーなるほど

「一誠、お泊まりってあのお泊まりですか？」

篠が小声で落ち着いたように話しかけてくる

「ああ、そうだよ、驚いたよ朝いきなり隣で寝てるんだもんよ」

俺も小声でそう言うと

「私も、あなた程ではありませんが朝、私の家の玄関先にその塔城さんともう一人そのカーテンの奥にいる女性が立っていて……」

「

「何い？お前二人も侍らせながら登校してきたのか！？くそ！お前あんま目立ってなかったろ！？」

「あなた方が目立ち過ぎなのですよ一誠」

そうこう話しているうちに黒髪ポニーが歩いてきた。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞお見知りおきを」

ニコニコ顔で丁寧なあいさつをされる、なんともつつとりしてしま
う声音だ

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそはじめまして
！」

緊張しながらもあいさつを返す。それを「うん」と確認するリアス
先輩

「これで全員揃ったわね。兵藤一誠君。時風篠君！」

「は、はい」

「はい」

「私達オカルト研究部はあなたを歓迎するわ」

「・・・悪魔としてね」

「私悪魔じゃないんですけど」

ボソリと篠がひとり言を言った

「ーっ」

何かが起こりそうです父さん母さん・・・

第六話 訪問 (後書き)

ふう……マジで神器どうしよ。土日で考えるか……

第七話、悪魔と堕天使、そして神器（前書き）

もうちょっとテンポ早くした方がいいですかね？でも伏線とか逃すと大変なことになりますからね。

第七話 悪魔と墮天使、そして神器

「粗茶です」

「ありがとうございます」

ソファーに座る私と一誠へ姫島先輩がお茶を淹れてくれた。

「ずつと一飲み

「おいしいです」

「あらあら。ありがとうございます」

うふふ、とうれしそうに笑う姫島先輩

テーブルを囲んで座る一誠、木場さん、塔城子猫さん、私、リアス先輩

「朱乃あなたもこっちに」

「はい、部長」

姫島先輩もリアス先輩と私の間に腰をおろす

全員の視線が一誠に集まる・・・私も合わせておきますか・・・

私も皆と同じように一誠に視線を向ける。あ、一誠と目が合いました

「何視てんだよお前もだろ」的な雰囲気ですね

「単刀直入に言うわ。私達は悪魔なの」

静かに驚く一誠

「信じられないって顔ね。まあ仕方ないわ。でも、あなた達も昨夜、黒い翼の男を見たでしょう？」

確かに。あれが夢でないなら俺はそれを見ている

「あれは墮天使。元々は神に仕えていた天使だったけれど邪な感情を持っていたため地獄に墮ちてしまった存在。私達悪魔の敵でもあるわ」

墮天使ときたか・・・ファンタジーもここに極まるね

「私達悪魔は墮天使と太古の昔から争っているわ。冥界――人間で言うところの『地獄』の覇権を巡ってね。地獄は悪魔と墮天使の

領土で二分化しているの。悪魔は人間と契約して代価をもらい、力を蓄える。墮天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。ここに神の命を受けて悪魔と墮天使を問答無用で倒しに来る天使も含めると三すくみ。それを大昔から続けているのよ」

「いやいや、先輩。いくらなんでもそれはちよつと普通の男子高校生である俺達には難易度が高いお話ですよ。え？オカルト研究部ってこつこついうこと？」

「――天野夕麻」

その一言を聞いて一誠と私は目を見開いた

「あの日、あなたは天野夕麻とデートをしていたわね？」

「・・・冗談ならここで終わってください。正直、その話はこつこつという雰囲気でしたくない」

それは、その話は俺にとつて腫れものに近い

その話をしたところで誰も信じちゃくれなかつたし誰も覚えていなかった

それをオカルトうんぬんで語ってもらつては困る

「本当のことですよ一誠・・・」

「篠・・・」

「私はあの夜、天野夕麻と闘いました。これ前にも言ったのですが、あなたの中では全て夢で認識されているみたいですね。私は天野夕麻と闘い負けました、そしてあなたは死んだ・・・」

「嘘だろ・・・篠・・・お前まで・・・」

「全て私が不甲斐ない所為です・・・」

悔しそうに俯く篠

「この子よね？天野夕麻ちゃんって」

俺は言葉を失つた、映っていたのはあの時確かに一緒にデートした夕麻ちゃんその人だったからだ。携帯にも残つていなかったのに・・・

「この子は、いえ、これは墮天使。昨夜あなたを襲つた存在と同質の者よ」

・・・墮天使？夕麻ちゃんか？

「この墮天使はある目的があつてあなたと接触した。そして、その目的を果たしたから周囲から自分の記憶と記録を消させたの」

「目的？」

「そう、あなたを殺すため」

「ーーーーーっ！」

「なんで俺がそんな！？」

「落ち着いて一誠。仕方なかった・・・いいえ、運がなかったのでしょうね、殺されない所持者もいるわけだし・・・」

「運がなかったつて」

信じられないと言つた顔の一誠

「なんで俺が殺されなきゃ・・・！っ！でも俺生きてるっすよ！」

「彼女があなたに近づいたのはあなたの身にとある物騒なモノが付いているかいないか調査するため。反応が曖昧だつたんでしょね、それでじっくり調べた、そして確定したあなたが神器を身に宿すものだと」

セイグリッド・ギア

神器・・・確か私が闘つたあの黒い翼の・・・えゝ誰でしたっけ、ドーナシックでしたっけ。あれもそんなことをいつていたような・・・）

セイグリッド・ギア

（これは・・・？何だ？魔法でも神器の力でもないな・・・貴様一体何者だ！）

篠が思案する

そこに木場さんが口を開く

セイグリッド・ギア

「神器とは、特定の人物に宿る規格外の力。例えば歴史に残る人物の多くはその神器を宿すつて言われている」

セイグリッド・ギア

「現在でも体に神器を宿す人は存在するのよ。世界的に活躍する方々がいらつしやるでしょう？あの方々の多くも体に神器を有しているのです」

セイグリッド・ギア

木場さんに続き姫島先輩も説明してくれました

「一誠、手を上にかざしてちょうだい」

「え？」

「いいから、早く」

リアス先輩が急かす。

「目を閉じて、あなたが一番強いと感じるものを想像してみてください」

「い、一番強い存在・・・ドラグ・ソボールの空孫悟かな・・・」

空想キャラですか一誠・・・

「ではそれを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべてその姿を真似るの」

((え・・・))

一誠と篠、同じことを思っただろう

まさか・・・一誠・・・本当にやるのですか、恥ずかしすぎる・・・

!!

「ドラゴン波！」

俺は両手を上下に合わせて前へ突き出す格好のまま、声を張り上げる。ドラゴン波のポーズだ。篠が笑いをこらえるように片手で顔を覆っている。くそ！

「さあ目を開けて。それで神器も発現するはず」
カッ！

俺の左腕が光りだす

はああああ!?

何これ！何これ！

光は形を成し左腕を覆っていく。俺の右腕には赤色の籠手らしきものが装着されていた

「なんじゃこりゃあああああああああ！」

チョー驚いてます俺

「それが神器セイゲリット・ギア。あなたのものよ。一度ちゃんとした発現ができればあとはあなたの意志で発動可能になるわ」
信じられねえ・・・でも・・・すげえ！

「さて・・・一誠のは発現できたとして、次はあなたよ篠・・・」

「え？私ですか？」

「そうよ、あなたは私達ですら認識できないものを持っているんだからあなたも持っているはずよ。神器を……」
セイクリッド・キア

冗談ではありません！何ですか私にも死ねと！？恥ずかしさで死ねとおっしゃっているんですかこの鬼は。あ、悪魔でしたね……

「ああ……順番が逆だったわね、一回死んで、悪魔に転生し直してからやる？私が手を下してあげるわよ？」

はあああああああああ！？

何ですかそれ！？

「そ、それは困ります。私生きてるんですからわざわざ殺さないでくださいよ〜」

最もだ

「冗談よ。けど悪魔になればもつと強くなれるわよ？」

「そうですね。人間であの力なら悪魔になればずば抜けて強くなれますわ」

篠は考え込む

（確かに、天野夕麻を殺すにはパワーアップした方が簡単に殺せますが）

「やはりやめておきます、別に悪魔が嫌いとかではありませんが。」

私はやはり人間として強くなりたいので……あと、」

「あと？」

姫島先輩が問いかける

「せっかく生き残れたのにわざわざ人間の体を捨てるなんてこと……

できませんからね。仮にも両親から授かった体なので。しかし、私が死にそうになったら、もしくは死んだならその時はお願いしませす。駄目ですか？」

「……良いわよ、別に、私は一誠も気に入っているけどあなたにも興味があるしね……」

「部長？もしその時は私に契約をさせてくださらない？」

「駄目よ朱乃、彼も私のもの」

「ずるいですね。そちらには一誠さんがいらっしやるのに・・・」
うれしい言葉ですが。あのく、死ぬ前提で話さないでくれます？フ
ラグ立ちまくりなので

「じゃあ神器（セイグリッド。ギア）はどつするの？」

セイグリッド・ギア
「神器は・・・とりあえず発現させてみます」

「良く言ったわ！じゃあさつきと同じようにして」

やはりやるのですか・・・でもまあ私が世界で一番強い存在は父さ
んですね

軍隊格闘の達人ですし。中将ですし。ちなみに私は末端の上級下士
官です

では・・・

立ち上がり腰を落とし左拳を前に突き出し右手は胸の前で掌底の構
えをします

思い出すのです。戦場を丸腰で駆けて行き弾丸の雨を見切り、敵陣
を陥落させるあの姿を・・・！

「くくくくくり」「くくく」

篠以外の四人が喉を鳴らす

「せつ！」

ドン！

「ふうううう・・・」

できました・・・これが私の本気！何か恥ずかしさより達成感がこ
み上げてきます

「できました・・・」

バガアアアアアン！！！！

「くくくくく！？」「くくく」

少し先で何かが砕け散ったような音

「何！？」

パラパラ・・・

放った掌底の先には教室の壁に大きな穴がポツカリ空いていた

「これ・・・何？」

リアス先輩が聞いてくる、私にもわからない

「衝撃波・・・ですわねこれは・・・」

やってしまいました。今まで衝撃波が出るほどの掌底放ったことありませんよ！？てか、なんで今出るんですか！？

「つくづく人間離れしてるわねあなた・・・」

「あらあら・・・」

「・・・」

啞然とするリアス先輩、姫島先輩、塔城さん。

その瞬間

パアアアア

一誠の時と同様、光を成していく・・・何故か私の目の前の空中で

・

光を成して発現したのは、真つ赤で若干楕円形の小石のようなもの

・

「何だ・・・賢者の石じゃない」

リアス先輩が興味がなさそうに言う

私も覚えがある・・・忘れようもない

「賢者の石というと複数の人間の魂を使って作るあの？」

「残念ですわね。もっと良いのが出ると思ってたのですが・・・」

残念そうに言う姫島先輩

ですがこれは・・・。っ！そうだ！あのおっさんは私の術を見てこう言いました、『そんな術、魔界にはないと』」

「あの・・・その賢者の石というのはそちらではどういった用途になっっているのですか？」

「これは本来悪魔や墮天使が体に取り込んで身体能力を少し強化するものよ。でも人間の魂は悪魔や墮天使が取り込んででも高が知れているの」

「それは神器ホムレツツノなのですか？」

「そうね、一応」

篠は少し思案した後口を開く

「その石、今はもう研究停止になっていますが、こちらにもありませんよ？」

「何ですって!？」

リアス先輩は驚きを隠せず身を乗り出す

篠はその動きに少し驚き

「事実です。しかもそれは我々錬金術師にとって至宝」

「錬金術？」

姫島先輩が頭に？を浮かべる

あなた方が言っていた、私が使っていた妙な力のことです。

「あれね・・・地面が爆発したり、大砲になったり色々・・・」

「はい、話は長くなりますが、良いですか？」

「良いわ、話して」

「では・・・錬金術を行使するには錬成陣と呼ばれる魔方陣のような物が必要です。これにエネルギーを流すことによつて術が発動します。魔法に近く万能に見える面もありますが、いくつか制限があります。その基本は等価交換であり、無から物質を作り出したり、性質の違う物を作り出すことは不可能。そのため、必ず原材料となる物が必要であり、その物質の構成元素や特性を理解し、物質を分解、そして再構築するという3つの段階を経て完了します。ただし、構築式に誤りがあったり、対価以上の物を錬成しようとするとう失敗し、時にリバウンドと呼ばれる現象が起きます。リバウンドが起きると術者に多大なダメージを及ぼします。」

「ということは、鉛筆からダイヤを作ることでも可能ですわね？」

「おいおい・・・」

「まあ、魔法というより、化学と表現した方が適切でしょう、これを見てください」

手の平をみんなに見えるようにかざす

「なに・・・これ・・・？」

「これは・・・」

「こんな円陣みたことありませんわね」

「……………」

興味津々に見るリアス先輩、木場さん、姫島先輩、塔城さんの四人
「これが錬成陣といい私のは右手が硫黄、左手が水銀の定義を為した陣です。これにより物質を爆弾に変成させています。材料が無ければできませんがそこらへんにある大抵のものは火薬に似せて錬成し爆発させることが可能です」

「次に、私の手首と指に刻まれているもの、これは主に地面、金属系の元素を錬成するもの、あの夜おっさんに使った大砲もこれを使いました。」

「これが錬金術です。ご静聴ありがとうございます」

恭しく頭を下げる

「理解したわ……ということは話を聞くにこの賢者の石は私達悪魔とあなた達人間では使い方が違うのね？」

「はい、その通りです」

「ということは……そう、錬金術師にとっての至宝ってそういう意味……」

「ですわね」

合点がいったかのように呟く二人

(頭良いですねこの二人……今のだけで分かったようで。まあ単純に考えれば分かりますが、現実的ではありませんからね)

「あなた達錬金術師が賢者の石を使うと対価を全く必要なくして無から有を作り出せるのね？」

「はい、何せ、人間の魂を複数使っているので、そうでなきゃ割に合わないでしょう？」

「すごいじゃない！それ！それこそ魔法みたいよ！？」

興奮するように言うリアス先輩。しかし私は

「人間の命です……あなた方悪魔や墮天使がどう思おうが、生きていたものを殺すのです、否、使うのです。あなた方は他人の命を闘いで使ったことありますか？感情もない。しかし生きていたもの

を使ったことが？殺したことは多々あるでしょうが」

「確かに・・・無いわね・・・」

しゅんとする二人

「私は正直使いたくありませんね。その神器を。」セイグリッド・ギア

雰囲気が悪い

「しかし・・・私達人間の価値観をあなた方悪魔や堕天使に押し付けるのは違いますね」

「じゃあこういうのはどう？篠が使いたくないのなら使わない、本当に使うべき時のために使う」

「・・・そうですね、良いでしょう。（使ってあげなければ魂達も持ち腐れですからね）」

納得する篠

「篠・・・」

神妙な面持ちで見えてくる親友

「ん？大丈夫ですよ一誠。大丈夫です」

「すぐく神妙な雰囲気になっちゃったけど二人の神器が発現したとセイグリッド・ギア

ころで話を続けるわね」

「はい、申し訳ないです」

頭を下げる篠

「あなたはその神器を危険視されて堕天使、天野夕麻に殺されたの。」セイグリッド・ギア

そして瀕死の中、あなたは私を呼んだのよ。この紙から召喚してね」

一枚のチラシ。俺はそのチラシに覚えがあつた。デートの待ち合わせ

せ中、チラシ配りからもらったものだ「あなたの願いを叶えます！」

という変な紙だ

「これ、私達が配っているチラシなのよ。魔方陣は私達を召喚するためのもの。こうしてチラシとして悪魔を召喚しそうな人達に配っているの。たまたま私達が使役していた使い魔が人間に化けて繁華街でチラシを配っていたの。それを一誠が手にした。そして、堕天使に攻撃された一誠は死の間際に私を呼んだのよ、願いが強かった

のね。普段なら眷属の朱乃たちが呼ばれているはずなんだけれど」
バツ！

その瞬間、俺と篠以外の人間の背中から翼が生える。墮天使とは違
うコウモリのような翼だ。

バツ！

俺の背中からも黒い翼が生えていた。

・・・マジか

俺、悪魔？人間やめちゃったの？

これはひどいww

何ですかこのカオスな空間は。親友ですら翼が生えています。まあ
当然でしょうが。改めて感じるとなんか・・・ね。というかこの中
でノーマル私だけ？寧ろ私がアブノーマル？

「改めて紹介するわね。祐斗」

呼ばれ、木場さんが私達に向けてスマイルをする

「僕は木場祐斗。二人と同じ二年生ってことは分かってるよね。え

ーと、僕も悪魔です。よろしく」

「・・・一年生・・・塔城子猫です。よろしくお願いします。・・・

・悪魔です」

小さく頭を下げる塔城子猫さん

「三年生、姫島朱乃ですわ。研究部の副部長も兼任しております。

今後ともよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ、うふふ」

礼儀正しく姫島先輩は頭を下げる。最後にリアス先輩。紅い髪を

揺らしながら堂々と言う

「そして私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・

グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、一誠、篠」

どうやら私達はとんでもないことに巻き込まれてしまったようですな

第七話 悪魔と堕天使、そして神器（後書き）

この回が一番疲れた！！

錬金術の説明難しい！！

ちよつと休むか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373ba/>

ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

2012年1月14日13時49分発行